

経済学説・思想史

美濃口武雄

一

理論・政策・歴史・統計——一橋経済学のあらゆる源流が福田徳三博士に求められるように、経済学史の研究もまた福田博士に始まっている。

大正五～六年の『東京高等商業学校一覽』中にある「専攻部教授要旨」のうち、経済学史の項は福田博士が書かれたものであって、その内容は左記のとおりである。

経済学、経済学史 第一年又八第二年

- 一、理論経済学ト比較経済史ノ連鎖トシテノ学説史ノ任務
- 一、方法学ノ現今ノ立脚地ト学説史トノ關係殊ニ自然学ト文化学トノ分別ニ関スル経済学現在ノ見解
- 一、希臘哲学中ニ於ケル経済学説殊ニアリストテレス政治学第一卷、倫理学第五卷ニ見ラレタル経済理論
- 一、羅馬法ノ経済思想附『アグリメンソーレス』ノ経済説及二三ノ羅馬哲学者

- 一、基督教教父ノ經濟說——希臘哲学及羅馬法ノ影響ニヨル其發達——教会法学ノ經濟思想殊ニトマス、ダキ
ノノ經濟說——私有財産論——『ウズラ』論——『ユストム、ブレチウム』論——『ダムスム、エメルゲン
ス』論
- 一、トマス以後ノ教会法学經濟論——ドンス、スコートス其他ノ主觀價值說——ラレスミウスニ至ル發達——
『レント、チャーヂェス』ニ関スル學說(ランゲンシュタイン、ライタ、ゲルソン等)——為替、保險、公
債ニ関スル學說ノ發達(スカチア)
- 一、『ヒューマニスト』ノ經濟學說——トーマス・モア、ニコロ・マキアヴェリ——其他ノ『ヒューマニス
ト』——宗教改革家ノ經濟思想
- 一、十六・十七兩世紀ニ於ケル伊太利ノ經濟學說附同期ニ於ケル西班牙經濟學說ノ一端
- 一、十七・十八兩世紀ニ於ケル和蘭經濟學說殊ニウセリンクス及ビーター・ド・ラ・クール
- 一、十六・十七兩世紀ニ於ケル英國經濟學說(ラチマー、スタッフォード、トマス・マン、チャイルド及カル
ペラー、ペター、ロック、キング、ダヴナン、ノース)
- 一、獨逸ニ於ケル『カメラリスト』ノ或モノ
- 一、十八世紀ニ於ケル英國經濟學說
- 一、『フキジラクラット』概論
- 一、アダム・スミス——其先驅——同時代ノ諸學者——直接ノ祖述者
- 一、英國特有ノ學問トシテノ經濟學ノ發達マルサス及リカルド詳論

一、マルサスヨリ出ヅル分派ゴトウキンヲ出発点トスル学説ノ發展

一、リカルドヨリ出ヅル分派殊ニマカロック、セニフル及ミル父子、リカード派社会学学説ノ一班、ワーウエン及其学派

一、大陸ニ於ケル反抗学説、殊ニブルドーン及マルクス、附其前後ノ潮流一班

一、独逸歴史学派ノ成立、附 利用学派ノ勃興及数学派一班、ジェヴォンス及メンガー詳論

一、学説發展ノ到達セル現今ノ立場ト其主要ナル理論上ノ問題、殊ニ所謂主観学派ト折衷学派ノ研究

一、学説史研究ノ結果ヨリ見タル所得理論及之ヲ中心トスル新潮流——アキレ・ロリア、デーヴンポート、

ピグー、リーフマン、ラッペンハイマー等ノ新理論ノ評論

一、同上ノ見解ニ基ク余剩価値理論、経済政策ニ及ボス可キ影響、社会政策ノ理論的根拠

右の講義要綱から、福田経済学史の特徴というべきものを幾つか指摘してみよう。第一は、西洋経済学の源流を、遠くアリストテレスのギリシャ哲学や中世の聖トマスの経済思想にまでさかのぼって求めている点である。

今日では、エミール・ジャム『経済思想史』、エリック・ロール『経済学説史』、ウィリアム・フェルナー『近代経済分析』など、ギリシャ哲学や中世教会思想から経済学の歴史を説きおこす学史家はめざらしくない。もちろん、福田・高橋両博士のアリストテレス論争にうかがわれるように、西洋経済学の黎明期を遠くギリシャ哲学に求めるか、近く重商主義時代に求めるかは議論のあるところであって、近頃では高橋誠一郎説のように、重商主義ないし重農主義あたりから、科学としての経済学が始まったと考える学史家の方が多いようである。しかし、経済学がわが国に導入されて間もない当時において、しかも語学力のハンディを負いながら、ギリシャ語・ラテ

ン語を必要とする古代・中世にさかのぼって経済学の歴史を解明しようとした福田博士の構想の雄大さには驚くばかりである。これにはもちろん、福田博士の人並みはずれた卓抜な語学力というものが基本になっている。博士の語学力の凄さについては、いまさらここに紹介するまでもないが、あまり一般に知られていないエピソードを一つあげておこう。杉本教授の『経済学を学ぶ』という著書に「師弟関係」というエッセイがあるが、このエピソードはそこに出ているものである。それは、博士が一九二五年にロシア学士院創立二百年祭に招待を受けて、モスクワを訪問されたときのことであった。このときイギリスからはケインズも招かれていて講演をしたが、福田博士は例のポレミックな調子で、ケインズ批判の演説をされたのである。ところが杉本教授によれば、「福田先生はケインズに聞かせるつもりで、英語で原稿をつくっておいたところ、ケインズは欠席し、出席者から英語よりドイツ語でやってくれという希望があって、即座にドイツ語で講演されたらしいのです」という。他方、『福田徳三先生の追憶』の中で、福田博士の門弟の一人武井大助氏は、この「英語でなくドイツ語で」というところを、「流石の先生もロシア語でなくフランス語で」と書いておられるので、どちらが正しいかわからないが、いずれにせよ、英・独・仏・露・ギリシャ・ラテン、なんでもこなせたということであろう。

しかし語学力だけでは、なぜアリストテレスや聖トマスに関心を抱かれたかの理由にはならない。五百旗頭真治郎氏の「福田・上田両博士の聖トマス研究」(一橋論叢第三十七巻第五号)によれば、それは、福田博士のドイツ留学中の恩師ブレンターノ教授の影響によるものだという。「ブレンターノは経済学思想の発展に対してキリスト教の与えた影響に格別の注意を払った人」であり、福田博士の聖トマス研究の「精神及び方法など基本的な線はブレンターノ教授の賜」であった。そして聖トマスは「アリストテレスの哲学とキリスト教説とを綜合

した人」であったために、博士はアリストテレスの原典にまでさかのぼったのである。

福田先生は聖トマス研究により法学博士の学位を授けられたのであり、左右田博士により、「福田先生のほかに書いたものは滅するとしても、トマスの一篇だけは後世に残るものだ」との高い評価をうけている。又、晩年の『厚生経済学研究』もアリストテレスの流通の正義の新しい解釈から生まれたものであり、トマス研究は、経済学史にとどまらず、福田博士の経済学体系の骨格をなすものといえよう。

福田博士の経済学史の第二の特徴は、あらゆる学派について万遍なく取りあつかっているところに求められるであろう。中世教会思想以降についてみれば、今日の経済学史書と同じく、重商主義、重農主義を始めとして、イギリス古典派経済学、マルクス経済学、歴史学派、限界効用学派と、当時としてはほぼすべての学派を網羅している。ただ、福田徳三全集第三巻に収められた「経済学史研究」には、キリスト教経済学説、帝国主義（II 重商主義）経済学説、マルサス・リカルド研究、英仏両国大小農制に関するアーサー・ヤングの研究、及び学説史雑考だけが掲載されていて、他の学派の研究内容については知ることができない。もっともその他の学派は、当時としては経済学史よりは経済原論でとりあつかわれるべきものであったろう。ともあれ、このように万遍なくすべての学派について論ずるといふ学風は、杉本教授が「一橋経済学の七十五年」（一橋論叢第二十四巻第三号）でのべておられるように、「本学の経済学の他学の経済学に対する特色」であって、「この学風は福田先生から出ている」のである。

ただし万遍なくあらゆる学派にふれるということは、当時としては決してたやすいことではなかったであろう。今日では、優れた訳書や良き学説史の案内書があるから、さほどの困難はないであろうが、当時はそのよう

なものに限られていたから、多くは原典をひもとかねばならなかったであろう。このような場合、原典を正確にかつ迅速に読むことが要求される。博士は「高商在学中に図書館の本全部を読破したとの評判が高かった方」であるし、御自分でも六万冊の蔵書を所有され、しかも、「誰よりも早く新刊の洋書をとりに寄せて忽ちに消化してゆく」というはなれ業をやつてのけた方である。毎月三千頁の読書を杉本教授は福田先生から要求されたようであるが、先ずはこの読書量の物凄さには感嘆せざるを得ない。しかも、これらの外国の文献を忠実にかつ正確に読むことを同時に要求された。高弟の一人であられる井藤半弥教授は、当時を回顧して、博士の指導のきびしさをこう書いておられる。

「福田先生の学生にたいする指導の方法であるが、研究題目を中心として、先生が外国文献を指定されて報告を命ぜられる。報告といつても、指定された書物または論文の要旨を、二百字詰原稿用紙、五、六十枚見当にまとめて書き、報告日の前日か前々日まで、先生の私邸にとどける。先生には、どんなにおいそがしい時でも、必ず精読され、各処に赤鉛筆で横線を引いたり、また短い批評を書かれたりして、報告日に研究室で学生にかえされる。——さて、学生は他の学生の前でそれを朗読する。これがいわゆる研究報告である。出来がわるい時は、報告前でもつきかえされ、やりなおしを命ぜられる」。

しかし、こうして外国の文献を忠実にかつ正確に読む習慣を身につけさせられたために、井藤教授のいわれるように、「先生の門下生の人の多くは、学説史の研究に関心をもつようになった」のである。たしかに、福田博士以降、本学で経済学史を担当した諸教授のうち、大塚金之助、杉本栄一、高島善哉、山田雄三は福田門下であった。

また福田博士の訳語についての正確さ、きびしさは、マルクス『資本論』の誤訳をめぐる福田・河上論争でも有名である。ただ高橋誠一郎氏によれば、この論争の背景には、『資本論』の翻訳をめぐる出版競争があって、大鏡閣から出版される予定だった福田博士校訂の『資本論』が訳者とのいざこざから、高島訳になったのに対し、岩波から河上訳が出るようになって、「こいつはいかんというので、河上さんの誤訳を指摘することになった」といういきさつがあるという。また杉本教授によれば、価値増殖行程とか余剰価値などの訳語は福田博士によるものである。

福田博士については、まだまだ書くべきことがあるが、紙幅の関係上ここでとどめておく。福田博士以降の本学の経済学史の流れを次に概観しよう。

二

福田博士に始まった一橋経済学史を、講義の担当者によってその流れを示せば、次のとおりである。

福田徳三（大正五～六年、九年）——高田保馬（大正一〇～一三年）——大塚金之助（大正一五～昭和七年）——上田辰之助、杉村広蔵（昭和八～一〇年）——上田辰之助、高島善哉（昭和一二年）——山田雄三、高島善哉（昭和一三～一五年）——山田雄三（昭和一六～一七年）——山田雄三、高島善哉、坂田太郎（昭和一八～二〇年）——杉本栄一（昭和二一～二三年）——上田辰之助（昭和二四～二七年）——山田雄三（昭和二八年）——山田雄三、馬場啓之助（昭和三一～三七年）——山田雄三（昭和三八～三九年）——馬場啓之助（昭和四〇～四二年）——種瀬茂、美濃口武雄

以上の担当者のうち、福田博士の直接の門下生は、大塚、杉本、高島、山田の四教授であるが、他の諸教授も福田博士の影響を直接、間接にうけているとみてよいであろう。これら諸教授の経済学史上の貢献を以下において概観してみよう。

先ず、福田博士の聖トマス研究を受け継ぎ発展させたのは上田辰之助教授であり、その成果は、『聖トマスに於ける職分社会思想の研究』（昭和八年）、『聖トマス経済学―中世経済史の一文獻』（昭和八年）、『トマス・アクナナス』（昭和九年）、『古代及び中世経済学史』（昭和一四年）などに発表された。大塚教授によれば、これらの研究によって「上田教授は、経済思想史研究においては福田徳三博士を乗り越したばかりでなく、世界の水準に達していたものといえることができる」のである。

上田教授が聖トマス研究にこれほどまで没頭したのはなぜであったのだろうか。五百旗頭氏はその理由を次のように解説する。

「上田は経済の理論と実践について、その先輩国たるイギリスに注目の眼を見張っていた。資本主義の発生と発展にも関心をもち、それにえいきょうを与えたプロテスタンティズム、ことにピューリタンとかクエーカーに興味をもった。ところがプロテスタンティズムを知るためにはキリスト教の根底に横たわるカトリシズムを知ることが必要であり、而してカトリシズムを知るためには先ずトーマス説を研究するのが適當であると考え、こうしてトーマス研究に没頭する契機をつかまえた。」

そしてさらに、福田博士と上田教授の聖トマス研究のちがいについてはこう説明している。

「福田はトマスの経済思想を研究したのに対して、上田は視野を狭義の経済に局限せず、更にその背景にある

社会や政治の面に拡げていった」

次に、福田博士が本学ではじめて導入したマーシャル『経済学原理』を、大正八年にいち早く翻記した大塚金之助教授の業績を指摘せねばならないであろう。『原理』はその後ギルポーの校訂版が出るに及んで、馬場教授により昭和四〇年から四二年にかけて改訳がなされたが、それまでは不朽の名訳として、我国近代経済学の学徒により読みつづけられ、日本においてイギリス経済学の研究を盛んにする素地をつくったのであった。その意味ではまさにエポック・メイキングな業績であったといえよう。大塚教授は翻訳の第一分冊で、原著者マーシャルを評して次のように書いておられる。

「教授の内には二つの魂がありました。一面に香気高い人道主義的理想を把持し、生活の経済側面を総観する高所に住む理想家であり、他面には冷やかなメスを振って血と肉との現実を切開する科学者です」

このマーシャル評はしかし、筆者には大塚教授御自身の御人柄をあらわしたもののような錯覚を覚えすにはいられない。マーシャルと大塚教授とが二重写しになって見えてくるのである。

そしてマーシャルの『原理』が導入されたことは、馬場教授のケインズ理解に典型的に示されるように、その後ケインズとの関係においてきわめて重要な意味をもったと考えられる。上田辰之助教授はこのことをいち早く見抜いておられる。

「ケインズを今ずいぶん大騒ぎしておるが、マーシャルの翻訳があったということが大きな前提であると思ふ。そうすると大塚さんの功績はたいしたものだと僕は思うな」

マーシャルということでは、杉本栄一教授のマーシャル『経済学選集』の翻訳にも言及せねばならない。この

『選集』は、昭和一五年、杉本、中山、高島、板垣、山田、金巻の諸教授によって分担訳出されたものであるが、巻頭の杉本教授による解説は、本学におけるマーシャル研究の水準の高さを示すものといえよう。

ところで杉本教授といえは、これほど福田博士の人格をうけつがれた門弟もないであろう。山中篤太郎教授は『福田徳三先生の追憶』において、杉本教授を通して福田博士を追憶しておられる。

「少なくとも彼のいやしくもせぬ読書態度、論争を通じての経済学展開へのはげしい情熱だけは、恩師から受けて彼自身も自ら鞭うってのぼした資産であったと私は見えています」

たしかにポレミックなところや、一字一句をゆるがせにしない厳しきなどは、福田博士と共通な面をもっておられたようであるが、杉本教授には杉本教授なりの学風があった。それは、福田博士がどちらかというところマルクス経済学を批判的にながめたのに対して、杉本教授の場合には、山田雄三教授の評しておられるように、「近代理論もマルクス経済学も広く見渡して真げんに自己の途を切開こうとしたところに杉本経済学の特色があった」のである。この努力はときに、近代経済学とマルクス経済学との「継木」と誤解されたこともあった。この点に關して杉本教授は、「近代経済学をめぐる問題」という論文の中で次のように弁明しておられる。

「そして『継木』というような通俗的な言葉が百パーセントの文学的効果を与えるのである。わたくしが『近代理論経済学とマルクス経済学』その他の論文でのべたところは、そのような意味においてではなかった……

『近代経済学』は価値論なくして貨幣の価値を説くことができるかという問題を検討すること、そこに近代経済学者同志の切磋琢磨が要求されるのである。労働価値説は形而上学的でとるに足らぬという近代経済学者たちの指摘がどういふ論拠に立っているかということを問ひ正し、マルクスの商品論および貨幣論の真意を対照的に展

開すること、その辺にマルクス経済学者と近代経済学者との間の切磋琢磨が具体的に行われる可能性もある。われわれは、そのような地固めの作業を期待しなかったのである」

杉本教授は思考方法において近代経済学には批判的であったが、それは教授にとって、近代経済学とりわけローザンヌ学派の機械的均衡理論があまりにも現象論的であり、本質論、実体論を欠いているとみたためである。しかも現象論的であることは、必ずしも近代科学の精神や方法にかなうものではない。否、近代科学はむしろ本質論に立ち返っている。このことを立証するために、杉本教授は近代物理学、とりわけ原子物理学を深く研究された。教授の遺族から本学の経済研究所に寄贈された蔵書の中には、マックス・プランクや、湯川秀樹、武谷三男などの著書が混っているのである。そして杉本教授は、近代経済学の現象論的立場が古いマッハ流の経験主義にもとづくものであり、現代物理学ではふたたび本質論的立場が持ち出されていることを確認されたのである。教授は『自然科学と社会科学との現代的交流』において、高島、都留教授と共に、物理学者の武谷三男、久保亮五氏等と真げんな討論を交わしているが、杉本教授のこの科学者らしい真面目な良心的な態度には深く頭の下がる思いを禁ずることができない。大塚教授は杉本教授の大学葬における追悼の言葉として、「原子エネルギー時代の社会科学におけるニールス・ボーアを一時にして失った」とのべておられる。

三

経済学史を展開する場合、どのような接近方法をとるかは学史家の個性によりさまざまである。マーク・プローグ『経済理論の歴史』やジイド・リスト『経済学説史』などは、過去の学説を万遍なくかつたんねんに年代順

に概観する。これに対してシュンペーターの『経済学史』は、一般均衡論にむけて単一指向的に経済学が発達してきたものと考え、経済学における進歩の歴史を描こうとする。これに対してスタークの『社会発展の関連における経済学史』は、広く文化一般に影響を受けつつ、歴史的な環境の中で経済学説が形成されたものとみて、歴史相対主義の立場をとる。この点、本学の学史はどのような特色をもっているのだろうか。

先ず杉本教授の場合には、どちらかといえば、第三の型の、経済史との関連で経済学の歴史を把握するという立場に立っているとみてよいであろう。なぜなら、この立場に立つときには、「同じ時代の同じ経済社会につき、二つまたはそれ以上の学説がその正しさを競うとき、いずれがその時代の歴史的経験によりよくあてはまるか」ということを判定できる」からである。しかし杉本教授は、歴史相対主義が陥る邪道にも注意を怠らない。そこで、「本来の意味における経済学史は、歴史を単なる過去の事実の集まりとしてみるのではなく、歴史を動かしている原動力に関連させながら、経済社会の歴史的に具体的な発展形態を確定し、経済社会のそれぞれの発展段階に現われた代表的な経済諸学説が、この発展段階によって如何に規定されており、また経済社会が一つの段階から他の段階に発展するにつれて、何故に甲の理論が崩壊して、乙の理論にそのところを譲らなければならなかったか、という歴史的な事情を解明し、そうすることによって、一般に、経済理論の生成発展崩壊の理法を、与えうるものでなければならぬ」とするのである。

右のような立場から書かれたのが、遺稿となった名著『近代経済学史』（一九五三年）である。この書物は一九七四年までに二十二版を重ね、紙型の痛みが激しくなったために一九七七年に改版が出版されている。今日ではもはや古典といつてよいであろう。またこれを、より一般向けに易しく書いた『近代経済学の解明』も最近改

版が出ており、今日もなお経済学徒の間に根強い評価を勝ち得ていることを証拠立てている。なお『解明』は「序文」にも説明されているように、門弟の末永隆甫、種瀬茂両教授が読者に代わって質問し、杉本教授がこれに答えたものを連記し、これに加筆訂正の手を加えて出来たものである。

このような杉本教授の学史観に対し、山田雄三教授はちがった立場に立っておられる。山田教授の場合には、ミュルダールの『経済学説と政治的要素』、シュンペーターの『経済学史』などが強い影響を与えている。『近代経済学史要』（一九五七年）の「緒言」から教授自身の言葉を引用しよう。

「ミュルダールは私が始めて大学で学説史の講義を担当したとき、もっぱら台本としたものであり、私の学説史の見方に強い影響をおよぼしたものである。しかし私のやり方はやや折衷的に、時代の順序なども多少加味している。その意味でシュンペーターの『エポツヘン』に近いといつてよい。ミュルダールとともにシュンペーターから学ぶところがきわめて多い」。

山田教授のこの書には、副題として「経済学はいかに進歩したか」とあるように、経済学が歴史的に経験科学としていかに進歩してきたかを概観したものである。そして歴史相対主義的接近に対しては、次のように厳しく批判している。

「すべての学説を時代に結びつけて説くことは一見理解しややすいので、考えの浅い人々には迎合される。しかしそれはイージー・ゴイングな見方である。それによつては科学そのものの内面的な進歩は明らかにされまい。経済学史にとって忘れてならないことは、新しい学説が古い学説にとってかわる進歩の過程をつかむことである」。

このような立場からすれば、杉本教授の学史観には批判的とならざるを得ない。事実、山田教授は、杉本教授のシュンペーター批判に対して次のように擁護しておられる。

「杉本栄一『近代経済学史』は経済学史を幾つかの型に分けているが、シュンペーターについては一面のみをみて、ある学説の立場を頂点におく学説史として理解しているようであるが、そういう学説の科学的進歩という一面と同時に、社会現象として学派を考えるという他の面がくつついているのがシュンペーターである。」

このように両教授の学史観にはかなりの隔りがあるように思われるが、その根底には、やはり科学としての経済学とは何かという認識上の相異があるのではないだろうか。ともあれ、両教授とも万遍なくあらゆる学派にふれておられるところは、福田博士の影響であろう。

四

本学の経済学史の歴史において、最後に特筆すべきことは、ケインズ経済学の導入であろう。本学では、鬼頭仁三郎教授がケインズ『貨幣論』の翻訳者として、いち早く戦前から『一般理論』にも深い関心を示していた。塩野谷九十九訳の『一般理論』の初版は一九四一年（昭和一六年）であるが、鬼頭教授は名著『貨幣と利子の動態』（昭和一七年）において、『貨幣論』と『一般理論』を綜合する「貨幣経済の理論」を展開しておられる。本書の「序言」には次のように書かれている。

「本書は最近における若干の学説、わけても私が久しくその中を低徊していたところの、ケインズの理論の批判と展開とによって、以上の如き意義をもつ貨幣経済の理論を基礎づけようとした試作である」

このようにケインズ経済学を「貨幣経済の理論」として把握していたことは、最近の高まりつつあるケインズ再解釈の動向と照し合わせて考えるとき極めて注目すべきことである。ではなぜこうした解釈が可能だったのだろうか。

第一の理由は、本学の場合、ケインズ経済学がアメリカを経由しての間接輸入ではなく、イギリスからの直接輸入だったことに求められる。早坂忠氏が『戦後日本の経済学』で指摘しているように、「敗戦による米軍の進駐とともに、戦時中、海外との通路を断たれていた日本の経済学界には、『一般理論』解釈をも含めて、戦中に飛躍的發展をとげた米国の経済学がセキを切って流れ込んできた」、そしてアメリカから流れ込んできたケインズ経済学とは、所得決定理論（＝乗数理論）としてのケインズ経済学であり、今日、教科書で四五度線図として描かれるケインズ理論である。これは一九三九年に、すでにサミュエルソンが「加速度原理と乗数の総合」において図式化したものであり、サミュエルソン、都留重人訳『経済学』や、クライン、宮澤健一、篠原三代平訳『ケインズ革命』などをつうじて我国に紹介されたものである。このようなアメリカ化されたケインズ経済学は、以後今日に至るまで永く我国の学界に定着してきたが、本学ではむしろ流動性選好説を軸とする貨幣経済論的ケインズ解釈がおこなわれてきたのである。それは、『一般理論』が『貨幣論』の延長線上にあることを、鬼頭教授がすでに『貨幣論』出版後のイギリス国内での論争、およびケインズからの書簡や『貨幣論』の「日本版への序」などで知っていたからであろう。先ず、一九三二年四月五日付けのケインズの「日本版への序」には、以下のように『一般理論』の出版が予告されている。

「私は以下の第三編及び第四編に示されている私の見解の理論的基礎を拡張し修正する純理論的な性質の小著

を公けにしたいと思っている」

そして早坂氏によれば、ケインズは一九三四年六月末の鬼頭教授宛書簡で、この近著を「貨幣の純粹理論と関連諸主題についての書」と記しているという。

こうした鬼頭教授の影響もあってか、昭和二八年「季刊理論経済学」誌上の座談会「貨幣的経済理論の再検討」において、中山伊知郎教授はヒックスのIS—LM曲線によるケインズ『一般理論』の定式化に対して、次のような示唆に富む批判をしておられる。

中山「ケインズのようにはじめからLMの関係を考えるのとは違って、ヒックスはそれを後から修正的に入れる。そこが違っている。その点、古典派的だと思う。」

安井「古典派的というのは」

中山「さきに実物的なものをおいて、あとから貨幣を入れるという段階的構想において」

ケインズ経済学の本学における独特な解釈が可能であった第二の理由は、先に指摘したように、マーシャル『経済学原理』が本学でいち早く大塚教授によって導入されたことと関わっている。馬場啓之助教授は『近代経済学史』（昭和四二年）において、同書の意図の第四番目に次のことを掲げておられる。

「ケインズ経済学の革新の意味を解釈するうえでその利子論の役割を重視したことである。これは、ケインズの貢献はなにも消費関数 \parallel 乗数理論の開発にあるとみる、A・H・ハンセンなどの解釈とは異なるものである。……マーシャルとは異なるケインズの社会観の特徴は、その利子論を媒介として経済理論に反映している。したがって利子論こそケインズ経済学の特徴をよく表わしている」。

そして教授は、マーシャルの利子論を「企業者の観点」から形成されたものであるのに対し、ケインズのそれは「金利生活者の観点」から展開されたものであるというユニークな解釈を示されるのである。

馬場教授のこうしたケインズ解釈は、ケインズ経済学とケインズが批判の対象にすえたマーシャル経済学との対比によって可能となったものであり、ここに本学のイギリス経済学導入の伝統の長さと同深さを感じずにはいられない。

以上、本学の経済学史の流れを概観してきたが、残念ながらここに触れることのできなかつた幾人かの教授の業績がある。しかし本稿で割愛したのは、「経済思想史」、「経済哲学」に関わるものであって、これらについては別の執筆者が担当することになっていることをおことわりしておきたい。

最後に筆者の感想を一言のべておく。本学の経済学史の歴史は、その歴代担当者のリストをみただけでも圧巻である。伝統の重みに耐えきれないような苦しみをとくとして筆者は味わうことがある。しかし学問の要求水準が高いことは常に励みとなるものである。良き伝統にめぐまれた幸せをあらためて感じつつ、今後の精進への決意を新たにすることもである。